【A1】

ビールのほうがよく飲みます
―“比較”に注目して―

原田 走一郎（長崎大学）

本発表の目的は，次の 3 点を示すことである。1. 標準日本語（口語）の「が」が対象につくこともあること。2. その対象につく「が」が許容される場合が“比較”を表す場合であること。3. この比較という概念が他の諸方言の分析にも有用であること。1 点目と 2 点目について，大学生へのアンケート調査の結果から述べる。「ビールよりワインのほうが飲むよ」という文の許容度は,「ビールは一滴も飲まないけど，ワインのほうが飲むよ」という文の許容度より高いという結果が出た。前者は「言える」と判断する人が 67%であった。3 点目については, 既存の研究や発表者による調査, 発表者の直観などに基づいて述べる。たとえば，和歌山方言の「しか」は「日本酒よりビールしか飲む（ビールのほうをよく飲む)」というように比較の場合には使用できるが,「(日本酒はまったく飲まないけど）ビールしか飲む」のような比較でない場合には使用不可である。

【A2】

佐賀西部方言の条件節の時制とモダリティ

有田 節子（立命館大学）

時制の対立のある節を導く 3 つの条件形式（ギー，ナイ（バ），トヤギ）を持つ佐賀西部方言（佐賀県南部の旧佐賀藩域の西部）において，ギー節では時制形式のアスペクト的性質が顕在化し，ナイ（バ）・トヤギ節ではテンス的性質が顕在化することを示す。ギーは限定の意味を表す「ぎり」が起源とされる。ギー節の時制形式のうち，基本形のアスペクト的性質は，範囲・限定を意味する「限り」節と共通する。一方，タ形は，ギー節ではアスペクト的性質が顕在化するのに対し，「限り」節では必ずしもそうではない。これは，ギー節が主節のモダリティの作用する領域を限定するという（仮定）条件節の機能を担っている一方で，「限り」節がそのような機能を担っているわけではないことに起因すると考えられる。「限り」に相当する佐賀西部方言の「カギー」の条件用法とも比較しつつ論じる。

【A3・招待】

日本語諸方言と韓国語の過去表現のムード的用法

高田 祥司（秀明大学）

岩手県遠野方言では，「コノ公園，展望台，{アッタ／アッタッタ／アルッケ} 」のように三種類の過去表現が用いられる。「～タ」は，ムード的用法として①〈発見〉(知らなかったが～)，②〈想起〉(確か～)，③〈認識更新〉(A. 本当に／B. やっぱり～)を持つが，「～タッタ」は②と③-B，「～ケ」は②のみを持つ。本発表では，「～ケ」が①,②,③の全てを持つ静岡市方言を遠野方言と対照し，「～ケ」がより古い段階の用法を保持していることを指摘する。「～ケリ＞～ケ」は，認識の側面における重点を現在から過去へ移し，①→③→②と用法を広げたが，遠野方言では現在の認識時の比重が大きい用法を失ったと考えられる。

また，-ess-，-essess-，-te-という過去表現が用いられる韓国語と遠野方言の対照も行う。これらは，「～タ」「～タッタ」「～ケ」とムード的用法以外は類似するが，-essess-が現在の認識時の比重が大きい①と③-A も持つ点，-te-が②を含めていずれも持たない点で異なる。

【A4】

時の内部構造と境界
―「このごろ」「最近」の類義関係―

佐藤 琢三(学習院女子大学)

本発表は，いずれも比較的近いと認識される過去から発話時に至る時間幅を表す「このごろ」と「最近」の２形式につき，その類義関係を明らかにする。「このごろ」は比較的近い過去から発話時に至る時間幅の内部構造を問題にし，時間幅全体を通して何らかの属性を有していることを述べるものであり，その属性は話者の経験に由来する。他方，「最近」は発話時に比較的近い時間幅を，他の時間と区別する境界に基づき示すもので，その時間幅内部の特徴に関しては特段の関心がない。このような両形式の意味特徴の違いは，連体修飾節，主題，焦点等に関わるさまざまな文法的振る舞いに明確に反映されている。また，ある領域の内部構造のあり方を述べることと，領域の境界を示し他と切り分けることという対比的な意味機能は，時間領域のみならず空間等の他の境域においても同様に関わるものであり，これらは認知的基盤を共有するものである。

【A5】

現場調査からみる指示詞の指示領域
―評価・感情によるコソアの選択―

岡﨑 友子（立命館大学）

指示領域（指示代名詞）の現場調査を行った岡﨑（2020）は嫌な対象ではソが早く出現し，好ましい対象ではコの領域が広くなるとするが詳しいデータと分析はない。そこで，本発表は話者の評価・感情に焦点をあて調査・分析を行った。結果から本発表は①話し手と聞き手が向かい合う場では聞き手領域に存在する危険を伝えたいという話し手の評価・感情，②両者が並び合う場では嫌な対象を自らの領域コから忌避したいという話し手の評価・感情，この①②がソをより選択させている可能性を示す。また，比較のため指示副詞の調査・分析も行った結果,「花」に対しコの指示領域がかなり広い被験者や「花」の種類によりコ・アを選択する被験者が見られた。以上より，話し手の評価・感情の影響が指示代名詞よりも強いことを指摘していく。【参考文献】岡﨑友子（2020）「現代日本語の指示詞コソアの指示領域」『文学論藻』第 94 号，東洋大学文学部紀要第 73 集日本文学文化篇

【B1】

「てもらう」における恩恵性の背景化と受動性の前景化

大園 雄也（関西外国語大学大学院生）

本発表では，補助動詞「てもらう」における非恩恵的な用法について，本動詞「もらう」の特徴を引き継いだ結果に因るものとの見方を示す。

補助動詞「てもらう」を使用した文（以降,「てもらう」構文）は，通例,「太郎は木村先生に褒めてもらった」のように，恩恵的行為の受領を表すものとされる。一方で,「雨に降ってもらっては困る」,「間違ってもらってはいけない」のように，話し手にとって好ましいとは判断できない事態にも「てもらう」が使用される例が認められる。

ここでは，この非恩恵的「てもらう構文」について，恩恵性の面が背景化し，受動の意味が前面に出た例であると位置づけ，このような特徴は,「パンチをもらう」のように，本動詞「もらう」にその源流を求められることを，例を挙げながら確認し，この構文の成立条件も含めて発表する。

【B2】

モダリティ形式「方がいい」の形態統語的特徴

田川 拓海（筑波大学）

本発表では，現代日本語（共通語）において「勧め」や「提案」として用いられる「方がいい」を取り上げ，拘束的（deontic）モダリティを担うモダリティ形式として文法化していることを示す。具体的には，拘束的モダリティの意味を担う「方がいい」は述語が動詞に限られるという制限,「が」を他の助詞に置き換えたり省いたりできない，主節化している，という単純な比較の「方がいい」にはない統語的特徴を備えており固定化が進んでいる。一方で「方が」と「いい」の間に他要素が挿入可能,「いい」が他の述語に置き換えられるという特徴が形態的緊密性の低さを示し，アクセントが一体化しないことから音韻的緊密性も確認できず，一語化しているわけではない。さらに，前の発話を受けて命題を担う節部分を省略する場合に「た方がいい」という形が容認されることから，前接する述語のタ形の「が」まで含めて 1 つのまとまりになっている可能性が示唆される。

【B3】

ラレテアル文の構文的な特徴とその意味・用法について

高 恩淑（獨協大学）

「動詞の受身形＋テアル」という形式（以下，ラレテアル文）は，対象となる主語の状態を描写する結果相を表すという点で「他動詞＋テアル」形と類似しているが，非文とされることが多かったため研究対象として取り上げられることは少なかった。しかし，実例が少なからず存在している点を考慮すると，どのような構文的な条件のもとでラレテアル文が成立するかを把握しておく必要がある。従来の研究においてラレテアル文は，単に「他動詞＋テアル」形の類型に沿った意味分類にとどまっており，その分類基準が明確とは言い難い。また，ラレテアル文は「他動詞＋テアル」形，または「他動詞受身形＋テイル」形に近い性質を有すると指摘されてきたが，どのような用法において両者の意味が表れるかについては明らかにされていない。本発表では，実例をもとにラレテアル文の使用実態を調査し，その構文的な特徴および意味・用法について考察を試みる。

【B4・招待】

謡伝書における音声観察―『音曲玉淵集』以外の資料から―

竹村 明日香（お茶の水女子大学）

本発表では『音曲玉淵集』以外の謡伝書の音声記述を観察し，そこには不完全ながらも調音音声学的な分析や，語アクセントを体系的に捉えようとする先進的な試みが行われていたことを指摘する。特に進藤以三の『筆之次』（1642 年）では「アタル」という節名を用いてアクセント核を示そうとするほか，日常語のアクセントも分析対象としている例が見られる。従来，謡伝書は中世語の伝承音を保存していると見なされがちだったが，実際は，当時の発音を合理的に分析しようとする科学的態度を備えていたことが窺える。また国学者の契沖や本居宣長は，「オヲの軽重」と「長音化による母音の析出」を自著の検証過程で用いているが，この二つの観点は謡伝書に頻出するものであることも指摘する。彼らは，謡伝書の本文を引用するというような直接的利用は行わず，謡伝書の有用な知見のみを「分析の枠組み」として活用するという間接的利用を行っていたと見られる。

【B5】

「動くと撃つぞ」型条件文について
―近世期以降のト条件文における例外―

竹林 栄実(東京大学大学院生)

現代語において，ト条件文の文末に意志表現は現れないが，「動くと撃つぞ」のように脅しを表す場合は許容されることが分かっている。本発表では，近世期から現代までの文末に意志表現が現れるト条件文を調査・分析し，また，タラ(バ)条件文と比較することにより，特に前件が聞き手の動作である脅し表現が用例の中心的な位置を占めること，現代語では個人間の発話として見られるのは脅し表現のみであることを示す。このように，脅しを表すト条件文がどの時期においても中心的なタイプとして現れ，モダリティ制約の例外として現代語にも残っているのは，「自動的な継起関係を表す」「前後件の事態の一体性を表す」という性質を持つト条件文の使用により，前後件が一体的で連動して起こる事態であるということを強調することで前件事態(聞き手の動作)に対する抑止力を強め，脅しの効果を最大限に高めることが出来るためであると考える。

【C1】

文法形式に基づいた日本語文体の多次元的抽出

中俣 尚己（大阪大学）

日本語の文体研究では英語の文体研究のような多数のジャンルのテキストから客観指標のみを用いて文体の評価軸そのものを抽出するような試みはまだ行われていない。本発表では 89 形式の機能語の調整頻度を用い,「白書」「雑誌」「自然科学」「文学」「新聞」「学会講演」「模擬講演」「用談」「会議」「雑談」の 10 ジャンルのテキストデータに対して因子分析を行った結果を発表する。4 つの評価軸が抽出された。

第 1 軸は説明力が高い D1「共感的対話 VS 客観的伝達」であり，終助詞や縮約形を多用し相手を巻き込む文体と，格助詞や受身を多用し主観を廃して伝える文体である。第 2 軸は「語り VS 非語り」で特に小説の地の文に特徴的な文体である。第 3 軸は「新情報の解説」で，模擬講演に特徴的な文体である。第 4 軸は「聞き手への配慮」であり，丁寧語を用いる文体と言える。

【C2】

幼児における副助詞に対する接続形式の習得時期の差異

東寺 祐亮（日本文理大学）

副助詞には，「宿題はあと国語だけだ」のように体言と接続するだけでなく，「あとは国語の宿題をするだけだ」のように用言とも接続する語がある。先行研究では，副助詞ダケの体言接続と，接続助詞カラの用言接続が同時期に使用され始めることが指摘されているが，副助詞の用言接続も同時期に使用され始めるのだろうか。本研究では，CHILDES データベース（MacWhinney 2000）に収録されている 2 人の幼児を対象として幼児の副助詞の接続形式を調査した。その結果，ダケ，クライ・グライ，バカリ・バッカリ，マデについて体言接続が先行することが観察された。シカ，ホド，ナドについては体言接続が先行するか，体言接続のみ観察された。本発表では，幼児の副助詞の使用において用言接続よりも体言接続が先行する傾向があることを指摘する。

MacWhinney, Brian. (2000) *The CHILDES Project: Tools for analyzing talk*. Third Edition. Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.

【C3】

話し言葉における助数詞の選択に関する一考察
―〈枚〉〈本〉〈つ〉〈個〉に注目して―

山本 晃子（立命館大学大学院生）

本発表では，〈枚〉を使用可能な対象名詞（「皿」「座布団」等）と〈本〉を使用可能な対象名詞（「ウィンナー」「懐中電灯」「映画」等）に，〈つ〉あるいは〈個〉が用いられる場合，助数詞の選択にどのような要因が関わるのかについて分析を行った結果を報告する。用例は『日本語日常会話コーパス』から収集した。結果として，〈枚〉〈本〉の対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用される場合，助数詞の選択には「共起する数詞」「対象名詞の形状」「用法」が関わる可能性があることを主張する。具体的には，①〈つ〉〈個〉は小さい数詞（主に〈つ〉は五以下の小さい数詞，〈個〉は一）と共起する場合に使用されやすいこと，②対象名詞の形状が〈枚〉〈本〉を使用する典型的な形状から離れるほど〈つ〉〈個〉が使用されやすいこと，③ 形状以外にも用法の違いによって〈つ〉〈個〉の使用されやすさに違いがあることを示す。

【C4】

現代日本語における境界直後の「だ」について

鄧 瑾瑄（京都大学大学院生）

現代日本語共通語では，判定詞「だ」が，発話冒頭（「だよね」），文節末（「お店にだなぁ，人がだなぁ…」），「なんて」を伴って名詞以外の品詞後（「9 月に雪が降るだなんて」）などの，談話・発話構造上の境界の直後に出現できる。本発表は，100 人以上の日本語母語話者を対象とした自然さ調査，及び『日本語日常会話コーパス』の実例に対する考察を通して，これらの境界直後の「だ」の実体を明らかにするものである。境界直後の「だ」は，通常の文末の「だ」として発せられることで，境界を越えて結束性を保つと同時に，文脈によって，話し手の発話時点の判断を明示する機能，あるいは話し手の発話時点の判断でない命題を構成する機能を発動し，先行発話をそれぞれ話し手の発話時点の判断，話し手の発話時点の判断でない命題として認定する。

【C5・招待】

普通体応答における「だ」の有無
―日本語教育文法として「「だ」は省略」は妥当か―

森 篤嗣（武庫川女子大学）

本発表で主として考察対象とするのは,「お茶飲む？―ううん，大丈夫」のような話し言葉の普通体において応答として用いる「ナ形容詞語幹単独用法」である（以下,「ゼロ形」とする。）本発表では，話し言葉における普通体応答において，ゼロ形によるナ形容詞語幹単独用法を無標として扱うべきであるという主張について，コーパスによる量的調査によって検証する。基本的に日本語教育文法としては,「自分に向けた発話」と「他者目当ての発話」及び，男女での使用傾向差（権威性の差）があるとしても，ゼロ形によるナ形容詞語幹単独用法を無標として扱った方が効率的であると結論づける。ただし，個別の語を見たとき,「嫌だ」についてはゼロ形よりもダ形が多く用いられるという点は日本語教育文法としても留意が必要である。

【D1】

助詞「ハ」と文構造が担う主題的意味のタイプ

坂本 瑞生（東北大学大学院生）

日本語の主題の研究は，助詞「ハ」の研究を中心に進められてきたが，主題表示には助詞以外の要因も関与する。特に，主題要素を構造的に卓越した位置（＝文頭）に置くという構造的要因が指摘されてきた（尾上(1995)）。そこで本論は，助詞「ハ」の有無（[±ハ]）と構造的卓越の有無（[±構造]）を区別した上で，４つの主題関連構文―①主題のハ（[+ハ], [+構造]），②転位陰題（[-ハ], [-構造]），③主題性の無助詞（[-ハ], [+構造]），④対比のハ（[+ハ], [-構造]）―が担う主題的意味のタイプを検討する。そして，①と③に共通する特徴を[+構造]が担う意味，①と④に共通する特徴を[+ハ]が担う意味だと認定する。この検討から，[+構造]は aboutness を，[+ハ]は contrast を表すと結論付ける。

【参考文献】尾上圭介(1995)「「は」の意味分化の論理：題目提示と対比」『言語』(24)-11, 28-37.

【D2】

数量詞の追加によるアスペクト性解釈の変化

張 琴琴（北海道大学大学院生）

本発表は，連体数量詞文と連用数量詞文の意味を比較し，アスペクト性解釈の変化のメカニズムを明らかにするものである。具体的には，まず数量詞の有無がアスペクト性の解釈に影響を与えない自動詞，移動動詞，存在動詞を考察対象外とし，消滅系動詞と出現・作成系動詞に焦点を当てる。次に,「30 個の苺を食べている」と「苺を 30 個食べている」,「2 本の論文を書く」と「論文を 2 本書く」という例を挙げて考察する。数量詞が欠如している文に連体数量詞を追加する場合，未完了の解釈および完了の解釈が可能となる。一方，連用数量詞を追加する場合は通常は完了の解釈が成立するが，これは完全に動作が完了したことを示すのではなく，部分的な完了に過ぎないことを主張する。さらに，証拠性の観点から，消滅系動詞では連体数量詞と連用数量詞は証拠性を持つが，出現・作成系動詞では連体数量詞は証拠性を持たず，連用数量詞の方が証拠性を持つことを指摘する。

【D3】

日本語関係節の派生と節サイズ

嘉藤 優太（神戸大学大学院生）

本発表は，日本語関係節の「派生」と「節サイズ」に関して議論を行う。久野（1973）は，英語とは異なり，日本語関係節の派生には移動操作が関与しないと主張している。また，Murasugi（1991）は，日本語関係節を CP ではなく TP（Murasugi は IP と表記）と分析している。本発表では， 日本語関係節の節サイズが TP ではなく CP であることと， 日本語関係節の派生には移動操作が関与することを示す。本発表の眼目は，そのようなことを示す新たな経験的事実を提供することにある。その帰結として，「ことがある」が CP ではなく TP をその補部に取ること，及び，「も」に束縛された未確定代名詞の NPI としての認可には局所性の制限があることも示す。【参考文献】久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店．Murasugi, Keiko. 1991. *Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, learnability, and acquisition*. Storrs, CT: University of Connecticut dissertation.

【D4】

可能構文の対象を標示するガ･ヲの交替に情報構造は影響するか
―指示距離による検証―

池田 尋斗（関西大学大学院生／神戸大学）

可能構文では対象を標示する格助詞としてガ・ヲがともに用いられる。可能構文におけるガ・ヲの交替要因として，これまで他動性，節タイプ，動詞の活用型が指摘されてきた。一方で，同じく対象の標示にガ・ヲが使用できる願望構文や「好きだ」を述語とする構文では情報構造（新情報 vs 旧情報）の影響が指摘されており，対象が旧情報であればヲが使用されやすいとされている。しかし，可能構文について情報構造の影響を指摘した研究は管見の限り見当たらない。

本発表では，可能構文におけるガ・ヲの交替に情報構造が影響しているかを検証する。その際，用例採集調査で得られた用例の情報構造を，指示距離（Referential Distance）という手法を用いて分析する。結果として，一部の動詞においてヲは対象が旧情報の文で使用されやすい，という傾向があることを主張する。

【D5】

経路を表す「を」格の対象性

佐藤 友哉（清泉女学院短期大学）

本研究は，現代格助詞「を」の経路用法（太郎が階段を上がる）にも対格用法同様に対象性が認められることを指摘し，対象性の具体的内容や特徴を示すことを目的とする。

一定の方向性を表す移動動詞「上がる」「通る」も，移動の意とその様態も表す移動動詞「歩く」「泳ぐ」も，主体が「を」の示す空間を逐次的に占めつつ移動することで，当該空間が，未接触空間を既接触空間に変えていく作用の対象になることを述べる。また，「空間を占めること」について他の助詞の場合と比較すると，「を」の経路用法は，①空間の占め方は動的である（cf.「机の上に本がある」），②動作の過程において空間を占める（cf.「太郎が駅に着く」），③主体が当該空間を対象に取った状態でその空間を逐次的に占めていくさまを表す（cf.「太郎が公園で遊ぶ」）という特徴を持つことを指摘する。最後に，経路用法が自律性を必ずしも要しない理由について対象性の特徴を基に説明する。